

陶淵明「孟府君傳」に關する考察

—「君」を中心として—

1、はじめに—孟嘉と孟嘉の傳について

「晉故征西大將軍長史孟府君傳」（以下、「孟府君傳」）は、陶淵明によって書かれた、母方の祖父孟嘉の傳である。孟嘉は庾亮、庾翼、謝永らのもとで官職につき、征西大將軍桓溫のもと、參軍となった人物である。その性質は溫和で冷靜、文章にも長けていた。官職にあってもそれに汲々とせず、飲酒を好んでも亂れないなど、陶淵明と重なる部分が多い。李長之『陶淵明』（松枝茂夫・和田武司譯 筑摩書房 一九六六年）は、陶淵明が魏晉の風度—「高貴」と「冷靜」という二つの風度を身に付けた孟嘉から、多大な影響を受けていると既に指摘している。この「孟府君傳」執筆時期は、文中に「淵明先親、君之第四女也。凱風寒泉之思、寔鍾厥心（淵明の先親は、君の第四女なり。凱風寒泉

の思い、寔に厥の心に鍾る）」と「母への追慕の言葉が見えることから、母の死後數年のうちに執筆されたと思われる。陶淵明の別集では「記傳贊述」部、かの有名な「五柳先生傳」の前に収載されている。

「孟府君傳」では孟嘉の出自、幼少時代からの評判、その名が廣く官界や隱士の間にも知られたこと、幅廣く交友があり魏晉時代の文人としての資質を充分に有していたこと等が、様々な逸話により描き出される。『陶淵明全釋』（田部井文雄・上田武著、明治書院、二〇〇一年）は「内容面においては、孟嘉の群を抜いた人品の高さ、人柄の濶雅さ、細節にこだわらぬ超俗性、更に龍山宴や許詢との出會いの挿話に見られるような文章や玄談についての秀れた才能が、生き生きと描寫されている半面、官僚としての具體的實績に關してはほとんど言及がない點

に特徴が認められる」と指摘されるように、政治政策面での描寫は見られない。孟嘉の人となりを描くことに主眼があったようである。傳の終わりには自身を「淵明」と言い、孟嘉の傳を記すにあたり、事實と異ならぬよう細心の注意を拂って記したことが述べられる。また、末尾には「贊」が付されている。

以上が陶淵明「孟府君傳」の概要である。では陶淵明の別集以外の孟嘉の傳には、どのようなものがあるのだろうか。孟嘉の事跡が詳しく見られるのは『晉書』である。『晉書』卷九十八の桓温傳の末尾に、孟嘉の傳が付されている。その内容は、陶淵明「孟府君傳」とほぼ同じであり、陶淵明「孟府君傳」と同じ逸話が収載されている。『晉書』の成立は唐代であることから、陶淵明「孟府君傳」を資料としているのは間違いないだろう。大矢根文次郎『陶淵明研究』は、次のように述べる。

晉書に孟嘉傳があるが、その資料は何から仰いでいるのであろうか。そのほとんどが淵明の孟府君傳に遵據しており、これを簡略にしたものである。それは淵明が敬慕する外祖父のために凱風寒泉の思いをこめ、戦々兢兢々、薄氷を履む思いでその行事を慎重に按採して作った傳であるから、令孤德棻等が信憑したのももっともであらう。その理由は資料入手の点からいっても、資料の取捨の点から見ても、また、その確實さからいっても第一のものを集めたと想う

からである。

その他に孟嘉の傳が見られるものは、『世說新語』および『世說新語』注、『藝文類聚』『北堂書鈔』『初學記』『白孔六帖』『太平御覽』等の類書、そして王隱『晉書』に収載されたもの(事類賦注・秋)である。これらに見える孟嘉の傳は、「孟嘉傳」、「嘉別傳」、「孟嘉別傳」と記されるものである。全て作者不明で、断片だけである。陶淵明集に見られるような長文ではない。これらはほぼ全て陶淵明「孟府君傳」成立以後のものであり、従ってその影響を受けたものと考えられる。ただ、王隱『晉書』所引の「孟嘉傳」は、陶淵明出生前に成立したとする論文がある。李劍鋒『晉故征西大將軍長史孟府君傳』不是陶淵明獨立創作的(人文述林第七辞 二〇〇七年)は、「孟府君傳」が陶淵明だけによって成立したのではなく、陶淵明は既に成立していた「孟嘉傳」に基づいて「孟府君傳」を記したと論じている。⁽²⁾このことは陶淵明自身が「謹按採行事、撰爲此傳(謹んで行事を按採し、撰じて此の傳を爲る)」と記していることと矛盾しないだろう。孟嘉の傳を書くにあたり、既存の孟嘉傳などから「行事」を採擇したと考えられる。

その他の「嘉別傳」や「孟嘉別傳」の成立や作者、相互の關連性について、明白な手掛かりは見られない。だが龍山の宴會で、孟嘉の帽子が風で飛ばされた逸話(龍山勝會)については、

人口に膾炙した有名な故事で多くの書物に引用されていることから、文字の比較検討は可能である。拙著「陶淵明『孟府君傳』考―『世說新語』注、『晉書』、類書等の記述と比較して―」（明治薬科大学研究紀要 人文科学・社会科学 二〇一一年）で考察した通り、類書等の孟府君傳の字句の異同を比較すると、どうやら二系統の孟嘉傳が存在がたらしい、ということが分かっている。

孟嘉の傳の手掛かりが少ないせいなのか、陶淵明と陶侃についての論は見られるが、孟嘉や「孟府君傳」という作品についての論はほとんど見られない。また、直前に収載された「五柳先生傳」が数多く論じられているのと非常に対照的である。「五柳先生傳」の論が多いのは、陶淵明と五柳先生は早期から同一視され、「五柳先生傳」には陶淵明自身の姿が見えてくるからであろう。その一方で、孟嘉は祖父といっても母方の祖父で姓も異なり、そして「五柳先生傳」のように陶淵明の創作性、創造性が溢れるようなものではない。また、孟嘉が晉に反逆を起こした桓温の下にいたという経歴も、かつては影響していたのかもしれない。しかし陶淵明を考える上で孟嘉が重要であることは既に李長之が述べた通りであり、「孟府君傳」の文學性、その文章が非常に卓越したものであるということも、大矢根文次郎『陶淵明研究』に詳細に述べられている通りである。本論文ではこうした「孟府君傳」について、特にその文學性という点か

陶淵明「孟府君傳」に関する考察（大立）

ら考察を行いたい。

2、「孟府君傳」における「君」

陶淵明「孟府君傳」と、類書等に引用された孟嘉の傳を比較すると、大部分が共通している。しかし大きな相違点は、陶淵明「孟府君傳」では孟嘉を指して「君」が使用され、他の傳においては全て「嘉」が使用されている点である。以下に有名な龍山の故事を挙げる。

陶淵明「孟府君傳」龍山の故事

九月九日、温游龍山。參佐畢集、四弟二甥咸在坐。時佐吏竝著戎服。有風吹君帽墮落。温目左右及賓客勿言、以觀其舉止。君初不自覺。良久如廁。温命取以還之。廷尉太原孫盛、爲諮議參軍、時在坐。温命紙筆、令嘲之。文成示温。温以著坐處。君歸見嘲、笑而請筆作荅。了不容思、文辭超卓。四座歎之。

（九月九日、温龍山に遊ぶ。參佐、畢く集まり、四弟二甥、咸な坐に在り。時に佐吏、竝びに戎服を著く。風有りて君帽を吹き、墮落す。温左右及び賓客に目して言うこと勿からしめ、以て其の舉止を觀る。君、初め自ら覺えず。良久しくして廁に如く。温命じて取りて以て之を還さしむ。廷尉太原の孫盛、諮議參軍爲りて、時に坐に在り。温紙筆

を命じ、之を嘲らしむ。文成りて温に示す。温以て坐處に著く。君歸りて嘲を見るや、笑いて筆を請いて荅を作る。了に思を容れず、文辭超卓たり。四座之を歎ず。

・王隱『晉書』引『孟嘉傳』

九月、温遊龍山。僚屬畢集、風吹嘉帽。落不覺、如廁。

孫盛時在坐。温授紙筆、命嘲之。著嘉坐處。嘉還見之、笑請紙作荅。了不容思。

・『世說新語』識鑿十六注『嘉別傳』

九月九日、温遊龍山。參寮畢集、時佐吏竝著戎服。風吹

嘉帽墮落。温戒左右勿言、以觀其舉止。嘉初不覺。良久如廁。命取還之。令孫盛作文嘲之。成、箸嘉坐。嘉還即荅。四坐嗟嘆。

・『藝文類聚』歲時 九月九日『孟嘉傳』

九月九日、温遊龍山。參僚畢集、時佐吏竝著戎服。有風至、吹嘉帽墮落。温謂左右及賓客勿言、以觀其舉止。

『孟嘉傳』や『嘉別傳』では、孟嘉を指して「嘉」と呼んでいるが、陶淵明「孟府君傳」だけは孟嘉を「君」と呼んでいる。「君」は、「府君」に對する尊稱であり、また亡くなった先祖に對する尊稱と考えられる。

通常「○○傳」として記される文では、人物はその「名」によつて記される。孟嘉であれば「嘉」であり、陶淵明であれば

「淵明」である。ところが陶淵明「孟府君傳」は、孟嘉を「君」と呼ぶのである。ここには、どのような文學的意味があるのだろうか。

3、「君」が使用される「傳」について

そもそも「傳」とはいかなる文章であろうか。大矢根文次郎『陶淵明研究』では次のように言う。

凡そ、史傳の構成は、まず姓字、郷貫、祖先、時をしるし、つぎに性格や人物をしるした後でその事績を述べ、最後にそれを要約して、史記ならば「太史公曰」、漢書ならば「贊曰」、三國志では「評曰」という評論がつき、その間に主題の人物像を織り交ぜ事績を描き出すのが最も一般的である。その點で史傳は敘事文學なのであるが、この傳もその構成に従つて敘述しているから、明らかに敘事文學である。：

陶淵明の「孟府君傳」は、出身地や事跡を竝べ、客觀的事實に基づき記述を進めてゆく點では「傳」の形式といえる。しかし『史記』や『漢書』等の歴史書を始め、「○○別傳」に見られる個別の傳においても、「君」を使用した「傳」體の文章は、あまり見られない。

嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』（中華書局 一九五八年）

の漢から劉宋までの文章を調べ、「傳」のスタイルをとりつつ、かつ「君」を用いてその人の事跡を記しているものを探してみた。すると三例のみ見つかった。一つは、姜維「蒲元傳」「蒲元別傳」である。二つ目は、顧愷之「父悅傳」である。三つ目は、陶淵明の「孟府君傳」である。

姜維「蒲元傳」は『藝文類聚』巻六十・刀に見られ、「蒲元別傳」は『太平御覽』三百四十五に見られる。姜維の「蒲元傳」と「蒲元別傳」は共通した内容であるので、ここでは一つの例として扱うこととする。内容は非常に似通っているが、「蒲元別傳」のほうがやや詳細である。蒲元に對してはどちらも「君」を用いている。ここでは「蒲元別傳」を挙げる。⁽⁴⁾

君性多奇思、得之天然。鼻類之事出若神。不嘗見鍛功。忽于斜谷爲諸葛亮鑄刀三千口。鎔金造器、特異常法。刀成。白言「漢水鈍弱、不任淬用。蜀江爽烈、是謂大金之元精。天分其野」。乃命人于成都取之。有一人前至。君以淬刀、言「雜涪水、不可用」。取水者猶悍言「不雜」。君以畫水云、「雜八升。何故言不雜」。取水者方叩首伏、云、「實于涪津渡、負倒覆水。懼怖。遂以涪水八升益之」。于是咸共驚服、稱爲神妙。刀成。以竹筒密內鐵珠滿其中、舉刀斷之、應手靈落、若雜生莠。故稱絕當世。因曰神刀。今之屈耳環者、是其遺範也。

陶淵明「孟府君傳」に關する考察（大立）

（君）性奇思多く、之を天然に得。鼻類の事、出だすに神の若し。嘗て鍛功を見ず。忽ち斜谷に于て諸葛亮の爲に刀三千口を鑄す。金を鎔し器を造るに、特だ常法と異なる。刀成る。白して言う「漢水は鈍弱にして、淬用に任せず。蜀江は爽烈にして、是れ謂えらく、大金の元精なり。天其の野を分かつ」と。乃ち人に命じて成都に于て之を取らしむ。一人有りて前み至る。君以て刀を淬ぎ、言う「涪水を雜えり、用うべからず」と。水を取りし者、猶悍く「雜えず」と言う。君以て水に畫きて云う、「八升を雜えり。何の故に襍えずと言うや」と。水を取りし者、方に叩首して伏し、云う、「實に涪津の渡に于て、負うるに倒じて水を覆す。懼怖す。遂に涪水八升を以て之を益せり」と。是に于て、咸に共驚服し、稱して神妙と爲す。刀成る。竹筒を以て内に鐵珠を密にし其の中を滿たし、刀を舉げて之を斷つに、手に應じて靈落すること、生莠を雜ぐが若し。故に當世に絶たりと稱せらる。因りて神刀と曰う。今の耳環を屈する者、是れ其の遺範なり

——「蒲元別傳」

蒲元という人物については、史書に言及が無く、詳細はよく分からない。『漢魏叢書』所收の『古今刀劍錄』⁽⁵⁾（梁・陶弘景著）には、蒲元と思われる人物に關する記述が見え、蜀主劉備等の

爲に八本の劍を作り、また刀五萬本を作った（「元造刀五萬口」という）。「蒲元別傳」によれば、蒲元は諸葛亮の爲に刀を三千口作っており、また、『全上古三代秦漢三國六朝文』には、蒲元から諸葛亮に宛てた「與丞相諸葛亮牒」が残存している。刀工であり、諸葛亮との關係が深い點を考えると『古今刀劍錄』に見える「元」は、蒲元を指している可能性がある。さらに姜維が蒲元を指して「君」と呼んだのには、諸葛亮と蒲元との人間關係が影響しているのかもしれない、と推測することもできる。しかし、『古今刀劍錄』の記述と「蒲元別傳」の記述は少しづつ違っており、全く別人の可能性も否定できない。さらに、ここで取り上げる「君」を説明するヒントとなるような人間關係も『古今刀劍錄』からは見出せなかった。

次に、「父悅傳」を擧げる。「父悅傳」は『世說新語』言語の五十七條注に見える。今、『世說新語』本文と注釋文の兩方を擧げる。

顧悅與簡文同年、而髮蚤白。簡文曰、「卿何以先白」。對曰、「蒲柳之姿、望秋而落。松柏之質、經霜彌茂」。(顧悅は簡文と同年なるも、髮、蚤くも白し。簡文曰く、卿何を以てか先んじて白きや」と。對えて曰く、「蒲柳の姿、秋を望みて落つ。松柏の質、霜を経て彌よ茂る」と)

——『世說新語』言語 五十七條

顧愷之爲父傳曰、君以直道、陵遲于世。入見王。王髮無二毛、而君已斑白。問君年、乃曰、「卿何偏蚤白」。君曰、「松柏之姿、經霜猶茂。臣蒲柳之質、望秋先零。受命之異也」。王稱善久之。(顧愷之、父の傳を爲りて曰く「君、直道を以てし、世に陵遲たり。入りて王に見ゆ。王髮に二毛無し、而るに君已に斑白たり。君の年を問ひ、乃ち曰く、「卿何ぞ偏えに蚤くも白きや」と。君曰く、「松柏の姿、霜を経て猶お茂る。臣は蒲柳の質にして、秋を望みて先んじて零つ。命を受くるの異なるなり」と。王善と稱すること久之し)

——『世說新語』言語 五十七條注 「父悅傳」

『世說新語』の内容は次のようである。顧悦は簡文帝と同年であったが、早くも白髪であった。そこで簡文帝が「どうして先に白髪になるのか」と尋ねた。顧悦は答えた。「蒲柳の姿は、秋になると葉を落としますが、松柏の性質というのは、霜がおりとよりいっそう茂るものなのです」と。劉孝標の注「父傳」もほぼ同じ内容で、兩者とも、顧悦はすべて「君」によって表されている。この逸話は、『世說新語』のほか、『藝文類聚』人部・老および『晉書』卷七十七・顧悦之傳にも見ることが出来る。『藝文類聚』は「世説曰」として、『世說新語』からの引用を明記している。『晉書』は、『世說新語』と『世說新語』劉孝標注に

ある「中興書」「父悦傳」に依據したのであろう。しかし、どれも顧悦を指して「君」とは呼ばず、名の「悦」と記している。『世説新語』注に引かれる別傳は膨大な量であるにもかかわらず、⁽⁹⁾「傳」體で「君」字を用いているものはこの顧悦のもの一例しか見いだせなかった。

『太平御覽』を見ると、先にあげた『全上古三代秦漢三國六朝文』の例のほかに、「杜祭酒別傳」「徐邈別傳」「衛玠別傳」「孫放別傳」を見ることができた。いずれも五十文字ほどの短い断片である。このうち「杜祭酒別傳」は、『太平御覽』卷三八五、五五五、七〇七で全て「君」が使用され、『北堂書鈔』(被二十七・履八十六)で引用される際も、「君」が使用されていた。仮にもし、別傳では本来「君」や「公」などの稱謂が広く使われ、類書等他書物に引用される際に個人名に書きかえられるのが通例であるならば、『太平御覽』『北堂書鈔』は「杜祭酒別傳」も杜某という名前で記したはずである。しかし「杜祭酒別傳」は「君」字が使用されているのであり、『太平御覽』『北堂書鈔』はそれを名に書き換えることなく「君」のまま編入しているのである。このことから、他書に引用される場合であっても敬稱から名への變換が行われない場合もあるが、それは極めて少ないのである。陶淵明「孟府君傳」は、現存するものの少ない、敬意の込められた「君」を使用した「傳」といえるだろう。

このように「傳」スタイルを用いていながら、曾祖父を「君」と

陶淵明「孟府君傳」に關する考察(大立)

呼ぶ陶淵明の「孟府君傳」は、やや特殊なものだと言えそうである。我々はこの「君」字の中に、史家や類書編纂者が孟嘉の傳を編んだのとは違った、陶淵明が曾祖父の傳を記した個人的な意圖、感情を汲み取るべきではなからうか。

4、「孟府君傳」の「君」と誄文、墓碑銘

「傳」形式で「君」が使用されている文章は、先に述べたようにごく僅かな例しか見られない。ここで、「傳」以外の形式で人物の一生を記し、かつ「君」「子」等が使用されているものは存在するのであろうか。魏晉六朝期の文章を調べると、誄文や墓碑銘の中に、陶淵明「孟府君傳」の文章と性質の近いものを見ることができた。以下にその一例を挙げる。

潘岳「楊仲武誄」序文

楊綏字仲武。滎陽宛陵人也。中領軍肅侯之曾孫。荊州刺史戴侯之孫。東武康侯之子也。八歲喪父。其母鄭氏。光祿勳密陵成侯之元女。操行甚高。恤養幼孤。以保又夫家。而免諸艱難。戴侯康侯。多所論著。又善草隸之藝。子以妙年之秀。固能綜覽義旨。而軌式模範矣。雖舅氏隆盛。而孤貧守約。心安陋巷。體服菲薄。余甚奇之。若乃清才儁茂。盛德日新。吾見其進。未見其已也。既藉三葉世親之恩。而子之姑。余之伉儷焉。往歲卒于德宮里。喪服同次。綱繆累月。苟人必有心。

此亦款誠之至也。不幸短命。春秋二十九。元康九年夏五月己亥卒。嗚呼哀哉。乃作誄曰：。

闕名「晉護羌校尉彭祈碑」

君諱祈。字子玄。隴西襄武人也。其先出自顓頊。有陸絳之裔子大彭。實主夏盟。君則其後也。歷郡右職州別駕從事。于時庸蜀未殄。侵擾王路。洮西之戰。因敗運奇。元帥獲安。寇厭疆虜。列上功狀。除舍人。還參本軍事。除涼州護軍。河右未清。戎寇鼎沸。謀謀神略。：。

闕名「晉右軍將軍鄭烈碑」

君諱烈。字休林。滎陽開封人也。其先出自宗周。建國于鄭。因胙命氏。君其後也。遠祖以元節著德。揚光漢氏之初。近葉以儒術博古。顯名中興之後。遷至曾祖先生皇祖徵君。蹈明哲之高尚。嘉肥遯而不悶。顯考將作大匠。實有茂德。載在國策。君應中和之醇靈。總文武之弘略。清識妙于研機。聰叡瞻于燭物。踐逸軌之遠迹。秉確然之大節。故雖夙罹不造。而能全老成之德。居無檐石。而能厲冰霜之絜。是以英材遽于羣萃。

これらは、故人の名前ではなく、「君」や「子」等の敬稱を使用し、死者の生前の行跡、徳行が記されている。陶淵明「孟

府君傳」のように「傳」形式を採用してはいないものの、死者の行跡を記した部分は個人の「傳」に似ており、陶淵明「孟府君傳」によく似ている。こうした例は、魏晉六朝期の誄碑に數多く見出すことができるのである。

ではなぜ、陶淵明「孟府君傳」が「誄」「碑」の文章と似ているのであろうか。それは、「誄」や「碑」の文章が、本来「傳」に近い性質をもっていたためと考えられよう。『文心雕龍』誄碑には、「誄」「碑」が「傳」の性質を持つことが記される。

「誄者、累也。累其徳行、旌之不朽也（誄は、累なり。其の徳行を累ね、之を不朽に旌すなり）」「詳夫誄之爲制、蓋選言録行、傳體而頌文、榮始而哀終（夫の誄の制爲るを詳らかにするに、蓋し言を選びて行を録し、傳の體にして頌の文、榮に始まり哀に終る）」とある。これらは、誄というものが、故人の生前の徳行を重ね述べ、それを不朽にするものであること、また、誄は、言葉を選んで行跡を記録するもので、傳の本質を踏まえつつ頌の修辭法を用い、榮譽を述べて哀悼の言葉で終わるもの、と言っているのである。また、碑については、同じく『文心雕龍』誄碑に「碑者、埤也。：夫屬碑之體、資乎史才、其序則傳、其文則銘、標序盛徳、必見清風之華。昭紀鴻懿、必見峻偉之烈。此碑之制也（碑は、埤なり。：夫れ碑を屬るの體は、史才に資る。其の序は則ち傳、其の文は則ち銘、盛徳を標序しては、必ず清風の華を見わし、鴻懿を昭紀しては、必ず峻偉の烈を見わす。此れ碑の制

なり」とある。碑文をつづるのは、歴史的な才能に據るものであり、序は傳記であり、その本文は銘の形をとる。大いなる徳を述べて清らかな風格を明らかにし、大いなる美点を明かして偉大な勳を明らかにする、これが碑の規範である、と言っている。このように、「誄」も「碑」も、故人の行跡を記す点においては、傳と同様の性質を持つものであると言えよう。「孟府君傳」と「誄」「碑」には客觀的に物事を記そうとする歴史的な視點をもとに有しているのである。

しかしまた一方で、「誄」「碑」は「君」や「公」等の敬稱を多用するものの、「傳」は通常、敬稱は用いられない。これについては、先に見た『文心雕龍』誄碑の言葉が参考にできる。「累其德行、旌之不朽也」「傳體而頌文、榮始而哀終」「其序則傳、其文則銘、標序盛德、必見清風之華。昭紀鴻懿、必見峻偉之烈。此碑之制也」、これらは、「誄」「碑」というものが故人の品德や功績を稱揚する爲のものであることを述べている。稱贊を中心とした文章において故人を「君」「公」等の敬稱で呼ぶことは、ごく自然なことと考えられる。一方で「傳」は、必ずしも故人の稱揚を目的としたものではない。「傳」は、より客觀的視點から人物を捉えて記されるものである。従って、敬稱ではなく個人名で記されると考えられよう。

このように考えると、陶淵明「孟府君傳」に見られる「君」

陶淵明「孟府君傳」に關する考察（大立）

は、「傳」の形式でありながら、「誄」「碑」のごとく故人への稱贊の心が込められているといえる。自分の曾祖父に對する文章であるから、故人への稱贊の心があるのは當然のことである。しかし、それではなぜ、陶淵明は故人の行跡を書き連ね稱贊する「誄」「碑」を書かず、「傳」形式を選択したのかという點が疑問となる。

「碑」と「誄」は本来、石碑に刻まれるものと葬儀の場で諡號を定め詠じられるものという全く別のものであるが、その文章構成には相互に似た部分を有しており、例えば東晉において墓碑建立の禁止令が出ると誄文が増加すること等、相互に深い關連があることが既に指摘されている（林香奈「漢魏六朝の誄について―墓碑との關連を中心に―」日本中國學會報四十五 一九九三年）。そこで「誄」の性質に着目すると、次の點が指摘できる。一つは、「誄」は本来、目下の者が目上の者に對して作らず、年少者が年長者に對して作らないという規則（『禮記』曾子問「賤不誄貴、幼不誄長（賤は貴に誄せず、幼は長に誄せず）」があったことである。孟嘉は陶淵明の曾祖父であり、當然、陶淵明より目上の存在である。陶淵明の時代には、すでに誄のこのルールは多くの場合無視されているものの、「誄」形式をとらなかつた理由の一つといえよう。

また、本来、「誄」は葬儀の場で音讀され、諡號を定める爲のものであつた『禮記』曾子問「賤不誄貴、幼不誄長」注「誄、

累也、累列生時德行、讀之以作諡（誄は累なり、生時の德行を累列し、之を讀みて以て諡を作る）。陶淵明が「孟府君傳」を書いたのは葬儀の場ではなく諡號を定める爲のものではない。「誄」のこの規則もまた、陶淵明の時代にはすでに重要視されなくなっていたものの、やはり本來あるべき「誄」形式と大きく外れていたのであり、「誄」形式を探らなかつた理由の一つといえよう。

そして最も重要な點は、「誄」は、哀切な調べをその中心とする點である。『文心雕龍』誄碑には「傳體而頌文、榮始而哀終。論其人也、暖乎若可觀。道其哀也、悽焉如可傷。此其旨也（傳體にして頌の文、榮に始まり哀に終る。其の人を論ずるや、暖として觀ゆべきが若し。其の哀を道うや、悽焉として傷むべきが如し。此れ其の旨なり）」と記され、「誄」は故人を稱揚するともにも、その人の死亡を悼み嘆くものであると述べられる。「誄」は、葬儀の場で音讀され諡號を定める爲のもの、また「賤は貴に誄せず、幼は長に誄せず」という性質を、時代とともに失つてゆき、しかしその代わり、亡き人を思慕し哀切な心情を表現することが重視されていった。陸機「文賦」の「誄纏綿而悽愴（誄は纏綿として悽愴たり）」や「北堂書鈔」所引の王隱「晉書」〔潘岳善屬文、哀誄之妙、古今莫比。（潘岳 善く文を屬る、哀誄の妙は、古今に比莫し）〕は、こうした誄の性質を示している。實際に誄文をみると、「嗚呼哀哉」等の嘆きの言葉が繰り返さ

れ、故人への嘆きや悲しみの言葉が述べられている。

陶淵明「孟府君傳」にはこうした哀切な心情の吐露はなく、故人の行跡を客觀的に記し孟嘉という人物を描くことが中心となっている。「孟府君傳」には、故人に對して「嗚呼哀哉」と嘆じ、涙を流してその死を悲しむという描寫もない。しかしこれらの作品と「孟府君傳」とは、全く異なっている。「孟府君傳」は「誄」の性質である哀悼の性質を有せず、故人への心情吐露を目的としているのではないのである。このことは、陶淵明が故人を思い流涕する「祭程氏妹文」「祭從弟敬遠文」「悲從弟仲德」といった作品と好對照である。

またこの時代の「誄」は、多分に修飾、虚飾されていた事も指摘できる。『世說新語』には「誄」を作成し、有名人と懇意であったように詠じたという話が載っている。孫綽が庾亮の誄文を作成し、それを子の庾羲に見せたところ「先君はあなたとここまで親しくなかつた」と憤慨し、誄を送り返した（『世說新語』方正 四八條¹⁰）、また、孫長樂が王長史の誄を作成し權勢や利益から離れた交友をしたかのように詠じたが、王孝伯はこれを見て「亡父がこんな人間と一緒に遊ぶものか」と言った（『世說新語』輕詆 一二條¹¹）、という話が見られる。これらは、「誄」が必ずしも故人の行跡を正しく書いたものではないという可能性を示している。陶淵明はこうした「誄」の風潮を避けるため、「傳」を選択したとも考えられるのである。

5、「孟府君傳」の持つ性質

では、陶淵明「孟府君傳」は、一體何を中心として書かれたものなのだろうか。「孟府君傳」はその末尾に、執筆者としての陶淵明の言葉が書かれている。

淵明先親、君之第四女也。凱風寒泉之思、寔鍾厥心。謹按採行事、撰爲此傳。懼或乖謬、有虧大雅君子之德。所以戰戰兢兢、若履深薄云爾。(淵明の先親は、君の第四女なり。凱風寒泉の思い、寔に厥の心に鍾まる。謹んで行事を按採し、撰びて此の傳を爲る、或いは乖謬し、大雅の君子の徳に虧くもの有らんことを懼る。戰戰兢兢として、深薄を履むが若きものある所以なりと爾か云う)

「淵明先親」とは、陶淵明の亡き母を指す。亡母は孟嘉の第四女であった。『詩經』に詠じられる「凱風」「寒泉」のごとく、亡母への思いがつのる。謹んで(孟嘉の)行狀を選び取り、この傳を作った。あるいは(孟嘉という人物との)乖離や誤り、大いなる君子の徳を損なうことがあるのではと恐れている。戦々兢兢として深淵に臨み薄氷を踏むように(この傳を記した)所以である、と。この言葉からも分かるように、悲しみを歎じたり、故人を華々しく稱賛したりすることを目的としていない。

陶淵明「孟府君傳」に関する考察(大立)

華美な稱賛もあるいは「虧大雅君子之徳」であるかも知れない。陶淵明の姿勢はあくまで「謹按採行事、撰爲此傳」に示されるように、孟嘉という人物を正確に伝えることである。

實際、「孟府君傳」には、人物を正確に伝えようとした部分を見出すことができる。たとえば、「孟府君傳」の始めには次のような文がある。

閨門孝友、人無能間、鄉閭稱之。沖默有遠量、弱冠儔類咸敬之。同郡郭遜、以清操知名、時在君右。常歎君溫雅平曠、自以爲不及。遜從弟立、亦有才志。與君同時齊譽、每推服焉。由是名冠州里、聲流京邑。(閨門孝友にして、人能く間するもの無く、郷閭之を稱す。沖默にして遠量有り、弱冠にして儔類咸な之を敬う。同郡の郭遜は、清操を以て名を知る、時に君の右に在り。常に君の溫雅平曠なるを歎じ、自ら以て及ばずと爲す。遜の從弟、立も、亦た才志有り。君と時を同じくして譽を齊しくするも、毎に焉に推服す。是に由りて、名は州里に冠たりて、聲は京邑に流る)

孟嘉の名聲について記されている。郡の人郭遜・郭立の名前を挙げ、彼らと勝ったとされたことが記される。この部分だけでも、具體的人物との比較があるため、どの程度の名聲であったのかを推し量ることができる。しかしそれだけではない。文

中の「名冠州里」と「聲流京邑」については、後の記述と関連する。まずは、「名冠州里」に關連する褚裒の逸話を見てみよう。

太傅河南褚裒、簡穆有器識、時爲豫章太守。出朝宗亮、正旦大會。州府人士、率多時彦。君在坐次、甚遠。裒問亮、「江州有孟嘉。其人何在」。亮云、「在坐。卿但自覓」。裒歷觀、遂指君謂亮曰、「將無是耶」。亮欣然而笑、喜裒之得君、奇君爲裒之所得。乃益器焉。(太傅河南の褚裒は、簡穆にして器識有り、時に豫章太守と爲る。出でて亮に朝宗す。正旦、大いに州府人士を會す。率多ね時彦なり。君は坐次の甚だ遠きに在り。裒、亮に問う「江州に孟嘉有り。其の人何くに在りや」と。亮云う「坐に在り。卿、但だ自ら覓めよ」と。裒、歴觀し、遂に君を指して亮に謂いて曰く「將た是れなる無からんや」と。亮、欣然として笑ひ、裒の君を得たるを喜び、君の裒の得たる所爲るを奇とす。乃ち益す焉を器とす)

ここでは鑑識眼のある褚裒が、州府の人士が大勢いる中で孟嘉その人を見分けたことが記されている。このことは、先に見た孟嘉は「名冠州里」という言葉の裏付けともいえる逸話であり、褚裒が数多くの州府の人士から孟嘉を識別できたことは、まさに州里に冠していたことを示している。

また「聲流京邑」については、帝から謁見が許されたことが

記される。

奉使京師、除尙書刪定郎、不拜。孝宗穆皇帝聞其名、賜見東堂。君辭以脚疾不任拜起。詔使人扶入。(使を京師に奉じ、尙書刪定郎に除せらるも、拜せず。孝宗穆皇帝、其の名を聞き、見を東堂に賜う。君辭するに脚疾にして拜起に任ぜざるを以てす。詔して人をして扶け入らしむ)

これらの逸話は、最初に見た「名冠州里」「聲流京邑」を具體的に裏付けるものであり、非常によく考えられて構成された文章といえるだろう。單にすばらしい人であったと記述するのではなく、誰によってどのような評價を得たのかという経緯や人物名を具體的に記しているのである。こうした姿勢は、作者の個人的な願望や嗜好によって歪曲された人物像ではなく、客觀的な事實に基づいていることを讀者に印象づける。作品の末尾に記された陶淵明の執筆者としての姿勢と合致するのである。また、こうした構造を確認できるのは陶淵明「孟府君傳」のみである。「名冠州里」「聲流京邑」の部分および帝から謁見を許された部分は、『晉書』『世說新語』に收載された孟嘉の傳では確認できないのである。

こうして慎重に描き出された孟嘉像からは、その「和」「正」

「順」な性格が見えてくる。「和」については桓温に重んじられたという話に出てくる「君色和而正」、「順」については孟嘉の處世態度などを示した話に出てくる「在朝隴然、仗正順而已。門無雜賓」に示される。こうした「和」の性質は、李長之「魏晉の風土の實際的意義と桓温派に屬した孟嘉」で、「高貴」と「冷靜」という言葉で表現した處世態度と言えよう。このような「高貴」かつ「冷靜」な孟嘉の人物像を最もよく表しているのは、残存する孟嘉の傳の中でも、陶淵明「孟府君傳」に他ならない。こうした部分は『晉書』や『藝文類聚』では削られているのである。あるいは編纂の際に、職歴を示すものでもなく、主要な逸話ではないと判断されて削除された部分だと思われる。陶淵明「孟府君傳」のみに見られる箇所に通すと、孟嘉の性格が溫和であったこと、その交友は官界のみならず、隱者許詢に至る幅廣いものだったこと、その一方で、温かい家庭を持っていたこと等が描かれている。こうした描寫は、孟嘉の人となりを表現するには重要な部分だったといえよう。

陶淵明が、文中、孟嘉をすべて「君」と言い表しているのは、府君であり先君である孟嘉への敬意を示している。また、最後に「淵明」が登場し、書き手である陶淵明自分が孟嘉の血縁であることを常に意識した文章であると明かしている。このように「孟府君傳」は、「傳」という客観的な記録でありながら、子孫が先君への敬意を込めて書いているのである。「淵明」と

陶淵明「孟府君傳」に関する考察（大立）

「君」という稱謂の中には、血縁意識と敬意が常に込められている。そしてその文章は、あたかも「誄」文のごとく死者を稱賛しているが、しかし、「誄」文のように哀悼を主眼としているのではない。そこには、孟嘉という人物の穩和で「正」「順」であった人となりを伝えようとした陶淵明の態度をうかがい知ることができるのである。そしてそれは、「孟府君傳」が「君」字を「傳」の中に使用したことにより、より文學的な効果を發揮しているといえるのである。

【注】

- (1) 本論を書くにあたっては、『魏晉全書』四（韓格中主編、吉林文史出版社、二〇〇八年）を使用した。
- (2) 王隱『晉書』の成立が陶淵明の生前であること、その王隱『晉書』に引かれる「孟嘉傳」もまた、陶淵明の生前に成立したと考えられるのである。
- (3) 王隱『晉書』のこの部分は、「事類賦注・秋」に見られる。本論文では、『魏晉全書』四（韓格平主編、吉林文史出版社、二〇〇八年）を使用した。なお句点については、陶淵明「孟府君傳」や『世說新語』などと比較し易くするため、變更した。
- (4) 参考に、「蒲元傳」を挙げておく。

蒲元傳曰、君性多奇思。於斜谷、爲諸葛亮鑿刀三千口。

刀成。自言漢水鈍弱、不任淬用。蜀江爽烈、是謂大金之元精。天分其野。乃命人於成都取江水、君以淬刀、言雜涪水、不可用。取水者捍言不雜。君以刀畫水、言雜八升。取水者叩頭云、於涪津覆水、遂以涪水八升益之。以竹筒密鐵珠滿中、舉刀斷之、應手虛落。因曰神刀。金屈耳環者、乃是其遺範。

(5) 魏世民「陶弘景著作考述」(淮附弗范學院學鳥 一九九九年第一期)では、『古今刀劍錄』について、以下のように解説している。

此慕又名《刀州村》、《通志・藝文略》、《宋志》均芝陶弘景著有《古今刀州村》一卷。此前，《本起村》、《隋慕》、《唐志》等均不需墮。

《四垂全慕惠目》指出此慕凡侃喋列和可疑之侃、然后又用唐李潤《尚慕故藝》一慕屬明此慕由來已久、从而得出潤胎範韋此慕已後后人所館亂、非盡弘景原文。

本論文で使用した『古今刀劍錄』の蜀主劉備の件には續きがあり、引用した部分の後に、唐代の人物のことが記述されている。このことについて、「陶弘景著作考述」では、『古今刀劍錄』の記述が一部唐代以降に加えられていることを指摘した上で、次のようにいう。

可知宸段文字當扮唐以后所加。但本慕所芝刀州均不需墮、故由此亦可推斷作者當是梁朝或稍后人物、況且弘景絡年又喜廐刀州、多次把自己所繕寶刀裝送武帝、所以弘景作此慕的可能性很大。

『古今刀劍錄』は、一部に唐以降に加えられた部分もあるが、しかし、記述された内容が他の書物に見られないものであることから、梁あるいはそれより少し後の人物によって書かれ、なおかつ陶弘景が晩年に刀劍を好んで鑄造している事實から、陶弘景がこの書を書いた可能性は高いとしている。

(6) 蜀主劉備、以章武元年歲次辛丑、採金牛山鐵、鑄八劍。各長三尺六寸、一備自服、一與太子禪、一與梁王理、一與魯王永、一與諸葛亮、一與關羽、一與張飛、一與趙雲。竝是亮書、皆作風角處所。有令稱、元造刀五萬口、皆連環。及刀口列七十二鍊、柄中通之、兼有一字。

(蜀主劉備、章武元年歲次辛丑なるを以て、金牛山の鐵を採り、八劍を鑄す。各の長さ三尺六寸、一は備自ら服し、一は太子禪に與え、一は梁王理(劉備の子の劉理)に與え、一は魯王永(劉備の子の劉永を指す。章武元年六月に、魯王となった)に與え、一は諸葛亮に與え、一は關羽に與え、一は張飛に與え、一は趙雲に與う。竝びて是れ亮が書するに、皆な風角(四方四隅の風が吹いてくるところ。『後漢書』

卷三十郎顛傳の注に「風角謂候四方四隅之風、以占吉凶也」とある。の處所（「風角」が四方四隅の風が吹いてくるところであり、それは八つの場所を指す。『漢書』卷八十七揚雄傳の應劭注に「四方四隅爲八鎮」とある。それぞれの風角に、八人の鎮となるべき人を當て、八本の劍を作ったのである）と作す。令有りて稱するに、元、刀五萬口を造る、皆な連環なり。刃口に及びて七十二陳を列ね、柄中に之を通ず、兼ねて二字有り。）

——『古今刀劍錄』

(7) 「父悅傳」とは、嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』による題名表記である。『世說新語』注にはただ「顧愷之爲父傳曰」としか記述されていない。

(8) 「顧愷之の父の名前は、『世說新語』では「顧愷」としているが、『晉書』では「顧愷之」としている。逸話の内容が同一のこと、晉の簡文帝と同一年であるという特徴から考えて、同一人物であると考えられる。『世說新語校箋』（徐震罈著 中國古典文學基本叢書 中華書局 二〇〇一年）言語八十八條の注釋に、「：晉人單名者或加『之』字」とある。

(9) 李祥年『漢魏六朝傳記文學史稿』（復旦大學博士叢書 復旦大學出版社 一九九五年）魏晉南北朝新傳記的崛起（中）によれば、『世說新語』劉孝標注は八十種類を超える別傳を引用している。

(10) 孫興公作庾公誄、文多託寄之辭。既成、示庾道愨。庾見、

陶淵明「孟府君傳」に関する考察（大立）

慨然送還之、曰「先君與君、自不至於此。」

(11) 孫長樂作王長史誄云「余與夫子、交非勢利、心猶澄水、

同此玄味。」王孝伯見曰「才士不遜、亡祖何至與此人周旋！」

(12) 「時彥」は、その時の名士を指している。